



泌尿器科の医師は男性が多く、女性の割合は全体の2、3%にとどまる。一方で扱う病気は、年齢を重ねることによる筋肉の衰えなどで子宮などの臓器が体外に出てしまう「骨盤臓器脱」や一部の「尿失禁」など、女性

特有のものも多い。女性医師ならではの姿勢で、同性の患者の治療に当たっている。

兵庫県出身で3月で松本を離れることが決

## 女性患者の心もケア

まったが、信州大学（松本市）と安曇野赤十字病院（安曇野市）で勤務した2年間に、さまざまな経験を積んだ。診察すると「病

院に行くのが嫌だった患者」も多いのだろう。そういう悩みを抱く男性もいるのだろうが、女性は特に悩みが深いと感じている。

来た」と話す人や、「こんな症状は私だけではないか」と尋ねる人もいた。手術が決まり、家族にも説明したいと話をもちかけた患者に「ここに来ていることは誰にも話していない」と打ち明けられたケースもあった。

患者を見せることにな

高知大学の医学部に入り、専門知識を得るようになってからも、最初のうちは泌尿器科への関心はあまりなかった。臨床実習で泌尿器科の診療の現場に入ると「女医は少ないのに、患者には女性もたくさんいる」と思った。「自分にとっても患者に対しても、私が女性であることが武器になる」と考え、5年生で泌尿器科を専攻することに決めた。

4月からは静岡県で働く。松本での経験を生かして、新天地でも研さんを積む考えだ。